

日本子ども社会学会  
第 28 回大会プログラム  
要旨集

2022 年 6 月 25 日(土)・6 月 26 日(日)

於 日本子ども社会学会第28回大会 Web サイト  
(<https://jscs2022miyagi.wixsite.com/jscs2022/>)

宮城教育大学

1. 期日

2021 年 6 月 25 日(土)9:00 ～26 日(日)17:00

2. 会場

日本子ども社会学会第 28 回大会特設 WEB サイト  
(<https://jscs2022miyagi.wixsite.com/jscs2022/>)

3. 日程

- ・予行練習 6 月 24 日(金)13:00～  
(テーマセッション・ラウンドテーブル・公開シンポジウム)※希望者のみ
- ・(遠隔会議システム方式:ZOOMとウェビナーを使っています。)

	9:00	10:00	12:00	12:50	15:00	17:00	20:00
1日目 6/25(土)	受付	研究発表	昼食	研究発表	理事会	研究発表	
2日目 6/26(日)	9:00 受付	9:30 テーマ セッション	11:30 総会 昼食	13:15 大会 シンポジウム I・II	14:45 移動	15:00 ラウンド テーブル	17:00 閉会

※以上の日程は、変更する場合があります

4. 大会参加費 無料(会員限定)

5. 参加方法 研究発表者と参加者に発表用・参加用のURLをメールにて送付します。

6. 発表時間(動画で発表する方のみ)

個人発表:発表 20 分程度、  
共同発表:発表 40 分程度、残りの時間は質疑応答となります。  
オンデマンド形式で行います。

7. 発表取り消し

発表の取り消しは、原則、認めておりません。発表の取り消しの場合は、早急にお知らせください。

8. 当日の配布資料

発表資料は、大会ホームページの『「自由研究発表」発表要旨送付フォーム』  
(<https://forms.gle/a6NejSPVZB8LQ1pw8>)より提出してください。ご提出いただいたPDF ファイル  
は、大会実行委員会でファイルの破損がないか、確認させていただきます。万が一、破損が見られた  
場合、大会実行委員会より発表者へご連絡させていただきます。

なお、発表内容は、通常の自由研究発表に足るもの(発表要旨とは異なります)としてください。大  
会 Web サイトに掲載した段階をもちまして、自由研究発表の成立とみなします。

また、掲載資料は、発表者の許可なく無断転載しないようにお願いします。

#### 9. 発表資料の提出期日

締切は、6月3日(金)です。6月4日(土)から1週間は、発表資料の公開に向けたWeb作業を行います。公開は6月11日(土)頃を予定しております。

#### ※発表要旨の配布について

今大会では、発表要旨集録を電子媒体のみで作成します。日本子ども社会学会ホームページからpdfファイルをダウンロードしてください。

#### 10. 大会実行委員会連絡先

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻青葉149

宮城教育大学 香曾我部研究室

E-mail: jscs2022miyagi@gmail.com

#### 11. 総会に関する情報

---

日本子ども社会学会第28回大会 総会

時間: 2022年6月26日 11:40 AM

ZoomミーティングURL

<https://zoom.us/j/94311929525?pwd=SmVJb3VKQ3I4d0ZRdDZUNnBWUGM2UT09>

ミーティングID: 943 1192 9525

パスコード: 982306

---

【 子どもと学校 】

- ① 場への「参加」と能力育成の認識  
ーオルタナティブな教育実践を行うA高等学校の事例よりー

平野邦輔(東京経済大学)

- ② 小学校におけるデジタル化と学力  
ー小学校教員を対象とした全国調査に基づいてー

○西本裕輝(琉球大学)、

○馬居政幸(静岡大学(名)・静岡県立大学(非常勤))

望月重信(明治学院大学(名))

藤田由美子(福岡大学)

角替弘規(静岡県立大学)

遠藤宏美(宮崎大学)

谷田川ルミ(芝浦工業大学)

- ③ 昭和初期中学校の学校騒動ー手塚岸衛と大多喜中学校ストライキ事件(1927年)ー

太田拓紀(滋賀大学)

研究発表 B

2022 年 6 月 25 日(土)10:00～20:00

【 子どもと保育1 】

- ① 「子ども同士が交わる場の保障」に関する保育所保育の横断的研究

橘 那由美(聖泉大学)

- ② 規範としての「子ども理解」

－ 刺激語に対する陰陽感情に着目して－

長津 詩織(名寄市立大学)

- ③ 集団活動の教示としての「注意」

－ 幼稚園年少級における保育者-園児間の相互行為分析－

粕谷 圭佑(奈良教育大学)

【 子どもとキャリア 】

- ① 進学校出身者の進路選択過程に関する研究  
ー進学校出身者の解釈に着目してー  
  
青木結(筑波大学大学院)
  
- ② 和歌山県A中学校における生徒の高校卒業後の進路展望  
ー「大学」のイメージに着目してー  
  
津多成輔(島根大学)
  
- ③ 高校生の学校生活とキャリア展望における学校間比較  
  
尾場 友和(大阪商業大学)
  
- ④ 学生が描く学級担任像  
ー学級経営意識調査の分析を通してー  
  
○長谷川祐介(大分大学)  
白松 賢 (愛媛大学)

研究発表 D

2022 年 6 月 25 日(土)10:00～20:00

【 子どもと心 】

- ① [遊びは子どもの心の発達にどのように寄与するのか](#)  
[松下恭平\(名古屋市立二城小学校\)](#)
- ② [原発事故で避難した福島の子どものアイデンティティ問題](#)  
[宇治和子\(郡山女子大学短期大学部\)](#)
- ③ [子ども研究における心理・精神をめぐる言説](#)  
[池田隆英\(岡山県立大学\)](#)
- ④ [「子供・若者総合調査」の結果からみた居場所感覚](#)  
[古賀正義\(中央大学\)](#)

研究発表 E

2022 年 6 月 25 日(土)10:00～20:00

【 子どもと言葉 】

- ① [ことばの教室創設における知識資源の活用と知識移転](#)  
[田中謙\(日本大学\)](#)
- ② [沖縄の子どもの教育課題としての言語](#)  
[ー幼小接続期の教職員の意識ー](#)  
[賀数さゆり\(お茶の水女子大学大学院\)](#)
- ③ [読書を巡る保護者の態度が、子どもの自己認識・学力認識に与える影響](#)  
[腰越 滋\(東京学芸大学\)](#)



【 子どもと家族 】

- ① [少女の行動制約と家族](#)  
[ーインドの都市スラムに暮らす10代の外出を題材としてー](#)  
[茶谷智之\(兵庫教育大学\)](#)
- ② [家族の多様化と保育ニーズ](#)  
[寺崎里水\(法政大学\)](#)
- ③ [子どもがつくり、壊す「家族」](#)  
[ールーマニアにおける社会的孤児の人類学的研究ー](#)  
[浅田 直規\(筑波大学 人文社会科学研究科\)](#)
- ④ [子どもの保護者から見たコロナ禍の生活について](#)  
[ー公営団地に暮らす子育て家庭の事例よりー](#)  
[宮嶋 晴子\(九州女子短期大学\)](#)

【 子どもと社会問題 】

1 〈他者〉としての自殺した子ども

今井聖(立教大学)

2 不登校は「問題」か？

ー当事者の語りに着目してー

佐々木龍平(広島大学大学院)

3 児童相談所虐待相談記録から見える「子どもの意見」

ー職員の意図する支援の方向性ー

○坪井 瞳(東京成徳大学)、山口季音(至誠館大学)

4 児童相談所虐待相談記録から見える「子どもの意見」

ー職員の意図する支援の方向性ー

○山口季音(至誠館大学)、坪井 瞳(東京成徳大学)

【子どもと保育2】

- ① 形成的アセスメントとしての子どもへの記録のフィードバックの可能性  
ー保育における「フォーマティブ・アセスメント」シートの試みー

高橋健介(東洋大学)

神永直美(茨城大学)

- ② 保育において子どものおもしろさをどう捉えるか

田島大輔(和洋女子大学)

- ③ 幼稚園におけるクラス対抗競技をめぐる日本と米国の保育者の考え方

中坪史典(広島大学)

肥田武(一宮研伸大学)

加藤望(愛知みずほ短期大学)

- ④ 保育者の職の継続(VI)  
ー中間管理職の対応に着目してー

中井雅子(元十文字学園女子大学)

研究発表 I

2022 年 6 月 25 日(土)10:00～20:00

【子どもと養護、相談】

- ① [社会的養護施設における相互行為のなかの子ども観  
ー児童養護施設・乳児院・母子生活支援施設ー](#)

[野崎祐人\(京都大学大学院\)](#)

- ② [児童養護施設におけるトラブル構築過程](#)

[宇田智佳\(大阪大学大学院\)](#)

- ③ [中学生における教師に対する信頼感と教師・友人への援助要請意図の関連](#)

[池田亜紗\(国際基督教大学大学院\)](#)

[磯崎三喜年\(国際基督教大学\)](#)

【 子どもと子育て支援 】

- ① 子ども支援のあり方について  
ー「家庭教育支援条例」・「こども家庭庁」をめぐってー  
  
友野清文(昭和女子大学)
  
- ② 保育における食育活動の現状と課題  
ー保護者に対する子育て支援の視点からー  
  
奥山優佳(東北文教大学短期大学部)  
斎藤祐子(東北文教大学短期大学部)
  
- ③ コロナ禍における子育て支援ツールとしてのICT活用  
  
二宮祐子(和洋女子大学)
  
- ④ 学童期における遊びの本質に関する一考察  
ーひと山まるごとプレイパークの実践からー  
  
川野 麻衣子(特定非営利活動法人北摂こども文化協会)

【 子どもと文化 】

- ① 子どもの権利と子ども文化  
ー1920年代の大阪に着目してー  
  
和田真由美(姫路大学)
  
- ② 絵本をめぐる科学の歴史的検討  
ー1970年代における絵本と赤ちゃんの観察記録を手がかりにー  
  
若林陽子(東京大学大学院教育学研究科)
  
- ③ 子育て支援における音楽の活用  
ー親子で楽しむ小規模の箏コンサートの実践に着目してー  
  
後藤 薫、中井雅子(元十文字学園女子大学)
  
- ④ 子どもたちが人形劇に親しむまちを目指して  
ーいいだ人形劇センター「人形劇講座」の成果と課題ー  
  
松崎行代(京都女子大学)

## 「学際性」という当初理念と現在、そしてゆくえ

### 【話題提供】

片山 悠樹(愛知教育大学)

『当初理念の成立背景－学会設立メンバーの共通感覚』

桜井 淳平(流通経済大学)

『学会員の子ども／子ども社会へのアプローチと学会への認識のありよう－2021年会員調査報告』

坪井 瞳(東京成徳大学)

『若手会員と学会－それぞれの研究関心と学会との関係性を紐解く』

### 【指定討論者】

加藤 理(文教大学)

### 【司会】

片山 悠樹(愛知教育大学)

### 【企画趣旨】

「学際性」は本学会にとって中心的な理念である。学会HPに掲載されている設立の目的をみると、子ども社会を総合的に研究するうえで「学際的」なアプローチを目指すことが謳われており(加えて「実践的・臨床的」であること)、また特集論文やテーマセッションでも「学際性」のあり方が問われてきた。しかしながら、「学際性」そのものに晦渋な側面が含まれていることもあってか、学会員のあいだで「学際性」に対する(緩やかながたちであって)共通の理解は、構築されていないのではないだろうか。そこで、本テーマセッションでは、「学際性」を可能な限り具体的に考えてみたい。

ただし、「学際性」を検討するにあたり、あえて「学際性」という言葉を用いず、学会員がどのようなスタンスで子ども／子ども社会にアプローチしているのか、その際、学会をどのような場をして活用しているのかということを議論したい。具体的には、主に以下の3つを問う。

- ①学会設立メンバーと理事経験者へのインタビュー調査から、学会設立の経緯と理念の設定を検討する。
- ②会員調査データをもとに、研究のアプローチの特徴および学会に対する認識を検証する。
- ③若手会員へのインタビュー調査に基づき、研究関心と学会との関係性を理解する。

以上の検討を踏まえ、「学際性」という理念が学会に定着しているのか、また学会における「学際性」としてどのようなかたちがあり得るのかを議論したい。

(担当委員:山田富秋(前・研究交流委員)・片山悠樹)

## オラリティと子どもの世界

### —「生きた言葉」を忘れないために—

【話題提供】 児玉 珠美(愛知学泉短期大学)

『子どもにとってオラリティの持つ意味とは?』

柴田 千賀子(仙台大学)

『保育実践と対話の重なり』

【指定討論者】 細辻 恵子(甲南女子大学)

【司会】 渋谷 真樹(日本赤十字看護大学)

#### 【企画趣旨】

情報があふれかえっている現代社会で、仕事の場でも私的な場でも、大量のコミュニケーションに  
対処している大人たちは、言葉から逃れたいと思っ  
てはいないだろうか。幼い子どもたちが声を上げ  
て、駆け回っているときに、共に声をかけながら、楽しむことができているだろうか。本テーマセッション  
では、オラリティ(声の文化)が、ともすれば軽んじられる昨今の社会で、子どもが育つ場において、ど  
のような意義があるのか、について、もう一度考えてみたい。

オラリティが大切にされている場所として、デンマークの国がある。そこでは、19世紀に社会教育を推  
し進めたグルントヴィの考えが今も息づいている。生活の中では、人々がそれぞれの思いを1回きりの  
ものとして言葉に出して、感情を共有しあうことが重要であった。それは、「生きた言葉」による対話で  
ある。しかし、効率が最優先され、目標に向けていかに素早く到達するかを競う今日の日本のような社  
会では、様々なことが無駄とされてそぎ落とされていく。その趨勢の中で、「生きた言葉」で語りかけ、  
相手からの語りかけを待つという対話をめぐって、デンマークに足を運んで、その文化の中で考察さ  
れて来られた話題提供者の先生方から、様々なヒントを得る機会としたい。

(担当委員:細辻 恵子・渋谷 真樹)



## これからの社会と子どもの造形活動・表現活動

### 発表者

河合規仁(東北福祉大学)

畠山智宏(常葉大学)

矢島毅昌(島根県立大学) ※司会・企画

### 指定討論者

笠原広一(東京学芸大学)

### 【企画趣旨】

子どもが造形活動や表現活動などを通じて芸術的要素に触れる経験は、これまで二面性のある評価が社会からなされてきた。一方では、子どもの想像力と創造力を育む営みとして肯定的に評価され、他方では、子どもの進学準備とともに多くの場合は軽視される営みとして否定的に評価されてきたと言えるのではないだろうか。

このように、造形活動や表現活動が子どもにとって大切であると考えられながらも、多くの子どもにとって主要な教育活動とは見做されなくなっていく二面性は、近年の社会状況下であらためて顕著になっていると考えられる。

2020年から世界を覆っている新型コロナ禍の影響により、子どもの保育・教育の場で様々な活動が縮小または中止されているが、特に子どもの造形活動や表現活動は実践が困難となり、縮小または中止を余儀なくされている。しかし、このような状況が長く続くにつれて、子どもの造形活動や表現活動の重要性が再認識されているのではないだろうか。

そして、これからの社会の見通しが不透明である中、社会生活へICTやAIを導入していく動向が加速しているが、それらのテクノロジーに代替され難い人間の能力が発揮されるものとして、造形活動や表現活動が注目されている。このことは、ICTやAIが重要視される時代に期待されるものは何かを捉える重要な手掛かりであり、これからの子どもと社会のあり方を考察する重要な論点であると言えないだろうか。

そこで本シンポジウムでは、子どもの造形活動やアートプログラムの研究者である河合規仁氏、造形教育やデザイン基礎教育の研究者である畠山智宏氏、教育社会学の視点による保育者・教員養成教育における表現活動の研究者である矢島毅昌氏から報告する。さらに、それぞれの論点を美術科教育研究者である笠原広一氏に整理いただき、活発な議論をしたい。

## これからの子ども文化を考える ーコロナ禍と少子化と令和新時代とともに生きるー

### 【司会・コーディネーター】

田中 卓也(静岡産業大学)

### 【話題提供者】

小島 千恵子先生(名古屋短期大学)

時田 詠子先生(群馬医療福祉大学)

小久保 圭一郎先生(倉敷市立短期大学)

丸山 ちはや先生(盛岡大学短期大学部)

橋爪 けい子先生(ひがしみかた保育園)

### 【指定討論者】

名須川 知子先生(桃山学院教育大学)

### 【企画趣旨】

日本は現在、少子高齢化社会を迎え、子ども同士によるふれあう機会が減少してきている。合計特殊出生率については「1.46」まで下がることになった。このような背景のもと、子どもらの自主性や社会性が育ちにくくなり、若手の労働力の減少などが引き起こされ、社会の活力の低下等の影響が懸念されている。

こうした状況に追い打ちをかけるように、コロナ禍が深刻化を増している。2020年1月に中国武漢で発生した「新型コロナウイルス」(covid-19)は、日本のみならず世界各地に蔓延拡大を見せることになった。いまだコロナ禍は2年を経過しても、以前猛威を振っており、第六波が日本にも襲い掛かっている事情である。

このような状況下で、子ども文化においては進展するのではなく、停滞しているといったことが現状といえる。少子化に伴い、コロナ禍で学校の授業は対面とオンラインのハイブリッド形式を採用し、また戸外で遊ぶ子どもたちも減少してきている。まさにこの令和期は、子ども文化の危機的状況であるといえよう。

本シンポジウムでは、保育者養成、または(小学校)教員養成、さらには児童文化財の継承者、文化伝承者などのさまざまな立場から、話題提供をしていただき、令和時代を迎え、子ども文化はいかなる方向性を辿っていくのか、現状と課題および展望について、ギャラリーのみなさま方とともに考えるものである。忌憚のないご意見やご質問をいただきながら、議論を活発化させることで、子ども文化の今後の在り方について真剣に考えてみたい。

## オルタナティブな学びの場に新型コロナウイルスが与えた影響

【コーディネーター】伊藤 秀樹(東京学芸大学)

【司会者】尾場 友和(大阪商業大学)

【提案者】藤村 晃成(大分大学)

内田 康弘(愛知学院大学)

伊藤 秀樹(東京学芸大学)

### 【概要】

2020年以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大は、学校だけでなくさまざまなオルタナティブな学びの場にも大きな混乱をもたらした。本ラウンドテーブルでは、オルタナティブな学びの場に新型コロナウイルスの感染拡大がどのような影響を与えたのか、それらの影響に子どもや教師／スタッフがどのように主体的に対応したのかについて、フリースクール・全寮制高校・高等専修学校の事例をもとに検討していく。

オルタナティブな学びの場の現状について、事例をもとに検討していくことには、以下の2つの意義があると考えられる。第1に、他のオルタナティブな学びの場でも子どもたちの様子に同様の変化が見られるときに、今回の事例検討で得られた知見は、その原因の見取りに役立つ可能性がある。第2に、将来的に新型コロナウイルスや新たな感染症の拡大によって、オルタナティブな学びの場が再び臨時休校や活動停止を余儀なくされたときに、今回の事例検討で得られた知見は、いかなる対応が必要であるかについての予測に役立つ可能性がある。

そうした意義をふまえて本ラウンドテーブルでは、フリースクールの事例について藤村が、全寮制高校の事例について内田が、高等専修学校の事例について伊藤が、教師／スタッフへのインタビューをもとに報告を行う。事例となる3つの学びの場には、いずれも不登校経験のある子どもを多く受け入れているという共通点がある。オルタナティブな学びの場におけるコロナ禍での経験を、どのような知へと集約していくべきかについて、ラウンドテーブルに参加してくださる方々と一緒に考えていきたい。

「1人1台・PCタブレット(端末)」が拓く学校教育DXの課題と可能性  
—小学校教員のデジタル化に関する全国調査をてがかりに—

【コーディネーター】

西本 裕輝(琉球大学)

望月 重信(明治学院大学(名))

馬居 政幸(静岡大学(名)・静岡県立大学(非常勤))

【司会者】

西本 裕輝(琉球大学)

馬居 政幸(静岡大学(名)・静岡県立大学(非常勤))

【提案者】

谷田川 ルミ(芝浦工業大学)

西本 裕輝(琉球大学)

米津 英郎(富士宮市立黒田小学校)

渡部 和則(秋田市立八橋小学校)

【討論者】

藤田 由美子(福岡大学)

遠藤 宏美(宮崎大学)

角替 弘規(静岡県立大学)

唐木 清志(筑波大学)

桐谷 正信(埼玉大学)

内容

昨年4月、全国の公立小中学校の児童生徒一人ひとりにPCタブレットが配布(貸与)された。しかも、特別な部屋ではなく日々学ぶ教室に、クラスの子どものPCタブレット全ての充電が一晩で可能な鍵のかかる保管庫とともに設置された。タブレット使用(保管庫の開閉)は担任の権限だが、操作の主導権は実質的に子どもの手にわたる。学校教育の約束ごとで教育機器(機能の限定)とされるが、機器のスペック(機能と操作性)を基準に判断すれば、保持する潜在力の顕在化を防ぐことは困難である。家庭学習(宿題や予習復習)ツール化を許容すれば、学校のルールを超える機能の発揮を競う意欲(好奇心)が生じることを避け得ず、より高度な操作を求める保護者は少なくない。それを禁止する権限は、学校と教員に与えられていない。ただし、これらはPCタブレット本来の機能に注目しての仮説である。

現状はどのように理解されているか。「学校パソコン、もう返したい、1人1台ばらまき先行、教師なお『紙と鉛筆』」(2022年2月15日日本経済新聞朝刊)との見出しによる学校と教師のサボタージュ(批判)とも“みなせる記事”の内容に、そうではないと反論する教員が多数派とは思えない。問うべきは、PCタブレットの活用頻度ではなく、「デジタル社会を生きる子どもたちに自律的なコミュニケーションや批判的な思考を教える」(上記日経記事より)ための機器と“みなされていない理由”である。

GIGAスクールやICT教育の学校での位置づけが、これまでの教室の日常で繰り返されてきた教科等の授業実践での活用方法(教育機器)のレベルに留まり(虚構)、学校教育のDXにつながる視座(実を創る志)から問われていない。この“事実”に“応える答え”を求めて、①「小学校教員の教育観とこれからの小学校教育—デジタル化の流れの中で—」(公益財団法人中央教育研究所)の調査結果、②学校管理職と教科教育研究者からの実践知、③Diversityの視座を重ねての討議を試みたい。

## 子どもを取り巻く習い事文化

田中卓也(静岡産業大学・申込者、企画趣旨、コーディネータ、指定討論者)

和田真由美(姫路大学・司会者)

木本有香(東海学園大学・話題提供者1)

小川知晶(川崎医療福祉大学・話題提供者2)

中島眞吾(中部大学・話題提供者3)

谷原舞(大阪信愛学院大学・話題提供者4)

野見山直子(彰栄保育福祉専門学校・話題提供者5)

塚越亜希子(群馬医療福祉大学・話題提供者6)

大西明実(東京家政大学・話題提供者7)計9名。

### 【概要】

わが国における幼児、児童の習い事について考察し、習い事文化がどのように形成され、影響を与えているのかについて検討する。

## 子どもがつくる・子どもとつくる～表現×文化×メディア

企画 駒 久美子(千葉大学)

話題提供 津田綾子(仙台白百合大学)・香曾我部琢(宮城教育大学)

甲斐聖子(日本女子大学)

仲条幸一(つくば国際短期大学)・駒久美子(千葉大学)

指定討論 高橋健介(東洋大学)

### 【概要】

子どもは日々、自分自身の思いや意図をもって「遊び」、そして何かを「表現」している。こうした子どもがつくる、あるいは保育の場で子どもとつくりだす表現や文化は、メディアとどのようにかかわっているだろうか。ここで述べるメディアには2つの意味をもたせている。ひとつは表現する手段としてのメディアであり、もうひとつは主に保育者のための記録・伝達する手段としてのメディアである。子ども自身の直接的な遊びとメディアはどのようにかかわるか、それにより子どもの表現あるいは文化はどのように変容するか、そしてこうした子どもの表現あるいは文化を支えるために保育者もまた、どのようにメディアとかかわることができるか、造形あそび(津田・香曾我部)、音楽あそび(中条・駒)、児童文化財(甲斐)から話題を提供する。指定討論者(高橋)をむかえ、フロアの皆様とともに子どもがつくる・子どもとつくる表現や文化とメディアのかかわりを検討していきたい。

## 日本子ども社会学会 第 28 回大会実行委員会

実行委員 香曾我部 琢(宮城教育大学) 委員長  
田中 卓也 (育英大学)  
藤田 清澄 (盛岡大学)  
津田 綾子 (仙台白百合大学)  
矢島 毅昌 (島根県立大学)

日本子ども社会学会 第 28 回大会 プログラム

発行日 2022年 4月 24日

編集 日本子ども社会学会第 28 回大会実行委員会

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻青葉149

宮城教育大学

香曾我部研究室

日本子ども社会学会事務局

〒152-0004

東京都目黒区鷹番 3-6-1

内外出版株式会社内